

よりもより明瞭である。それゆえこれらの病名を西洋医学の病名に比定する場合には、よほど注意を払わなければ本来の意義を誤る恐れがあるし、またかえって文意が通じなくなることもあるので慎重な取り扱いを要するものと考えらる。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所・医史文献研究室)

『医心方』の伝写について (Ⅶ)

杉立義一

『医心方』は申すまでもなく、丹波康頼が隋・唐及びそれ以前の中国書二百数部より必要条文を抽出して、その構想のもとに三十卷に分類撰述したものである。しかし現存する『医心方』三十卷(書陵部本・安政本)の中には、中国原典に由来しない文章や字句が若干含まれている。これは康頼が原撰時に挿入したのか、あるいはその後書き加えられたものであろうが、それらを大別すると次のようになる。

一、本文中にあるもの

- 1 卷一の諸薬和名第十
- 2 卷二の巻首の康頼撰文
- 3 各巻の行間および欄外にある注
- 4 各巻にある「今案云云」という文

二、巻末にある識語

三、背記

これらを仔細に検討することにより、『医心方』の撰述・伝写等を解明する手掛りがえられると考えている。今回はこの中、次の二つの文章について考える。

一、卷二の巻首

夫黄帝明堂経華扁緘灸法或繁文奥義卷軸各分或上孔下穴次第相違既而去聖綿邈後學暗昧披篇案文之間急疾難治取艾作炷之要穴易迷是以頭面手足胷脇腹背各隨其處盡抄其穴主治之法略注穴下針灸之例詳付條末專依軒宮之正經兼拾諸家之別說唯恐輕以愚戾之思猥亂聖賢之蹤譬猶復蠅之自迷燈爍蟬之不知雪矣

二、卷十四の五十九丁

今案天平九年六月廿六日下諸國官符云九是疫病名赤斑瘡初發之時既似瘧疾瘡出之間經三四日支體府藏大熱如燒當是之時欲飲冷水固忌莫飲以綿能勒腹腰必令温和勿使冷寒又鋪設既薄无卧地上唯於床上敷箒牀得卧息又粥饘并煎餅粟等汁温冷任意可用又糲粳糴以湯饘食之又病癒之後雖經廿日不得輒喫鮮魚菜菓菜并飲水及洗浴房室強行步當風雨年魚不可食但乾鰓堅魚等煎否皆良

(京都市)

『福田方』組成文献の解析

小曾戸 洋

『福田方』全十二巻はわが国南北朝時代の僧有隣(常陸国鹿兒郡東福寺開山)によって一三六三年頃に著わされた医書である。この書は引用文献名を明記しており、そのうちには佚書も含まれることから、中国古医書輯佚の材料として看過できぬものである。また当時いかなる医書が日本に舶載されていたか、すなわち医学文化資料伝来の実情を探る絶好の文献でもある。あるいは田代三喜・曲直瀬道三を生む基盤になったとも目される。このように『福田方』は日中医学史上極めて重要な書でありながら、今日その研究はほとんどなされていない。演者はこのたび全巻を通検して引用書名索引を作製し、『福田方』組成文献について初步的解析を行ったので報告する。底本はいま日本古典全集本による。

漢代の書に由来すると考えられる医書からの引用に「内